

大学放浪記 (23)

伊藤信孝

マエジョ大学客員教授・再生可能エネルギー学部

本報では2つの国際学会参加について、筆者の思いや感想を記す。まえもって何のアナウンスも無いままに i-FAISEN の Call for Paper のアナウンスメントが届いたのは6月の16日で有り、貴方のネットワークを通じてこのアナウンスメントを関係者に配信して欲しいとの依頼が知人から入ってきた。間髪を入れず知る限りの知人、友人、関係者に配信為て、あらためてアナウンスを見ると、7月初めに開催の2つの国際学会イベントに参加する者は参加せよ、参加登録費は無料であり、その他の費用もイベント参加に限り全て無料という内容であった。しかし参加の条件は、6月20日までに発表予定の論文のアブストラクトを、またフル・ペーパーを6月30日までに投稿する事の2つであった。ホスト大学の一員として、必ず出席、参加をすべき重要なイベントと位置づけ、翌日までにアブストラクトを提出した。すぐに反応があつて、簡単なチェック (Peer review) をしたが受理すると言う返事であった。すぐさま研究発表に必要なスライドを探し、準備態勢に入った。しかし6月23日の早朝からメホンソン・プロジェクトに参加のため、出発しなければならない。メホンソン滞在中はおそらく論文作成は難しいと判断したが、ラップトップパソコンとハードディスクを用意し時間の合間を縫ってその機会を探したが、やはり連日のイベントでその余裕はなく、結局手つかずの状況で大学への帰還となった。メホンソン・プロジェクトを終えて6月27日はマエジョ大学への帰還日であり、結局無事に帰還したのはその日の午後4時頃であった。ほぼ1日中車の中に座っての移動であるから10時間そこそこのロングドライブではそれなりに疲労も溜まる。十分な休養も必要であるが、そうもしておれない。気力を振り絞って論文作成に取り組むべく、気持ちは高揚していたが疲労を解消するには難しく、いつの間にか居眠りをして居る自分の姿を見ることになった。提出期限の6月30日まで正味3日間であり、それからの3日間は不眠不休の連続であった。しかし気力が体力をまさり、何とか期限厳守での対応になった。何故このようなことを為たのか、或いは為なければ成らないのかは個人の考え方による。筆者の場合は、自らが所属する大学がホスト大学としてイベントを企画、世話をする以上、またそのイベントが自分に関係が無いならともかく、大いに関係のあるイベントである以上、またアナウンスの配信を依頼されたりして居る限りに置いては、基本的に参加協力するのがごくあたり前の常識であり、行為であると考えている。急な連絡だから等と言っている暇はない。また外国人教員としても、日本人の対応を知らしむるべきと考え、恥ずかしい行為はしないと云うのが筆者の信条であり心得である。国際学会イベントで論文発表もせず、のうのうとパーティやバンケットに参加し、私は客員教授ですという醜い姿はさらしたくない。何事があっても時間厳守、それなりの対応を最大限にして依頼、要請に応えると言う魂だけは伝えたい。これが日

本人だと言う意気込みである。そうした姿勢をどれだけの人が見ているかは関係ない。心ある人の目に映ればそれで良い。i-FAISEN & AAACU の企画を知ったのは6月16日であるから極めて異例づくしのイベント参加である。もちろんそれなりに発表する内容がなければならぬ。またそのためにはデータ、資料のストックがなければならぬ。学会での発表はオリジナルな論文と一般に言われるが、もちろんその上に何を為ようとしているか、またその目的はなどいろいろある。時代遅れの部分もあるが何故そうした古いトピックに固執するのか、それは長年掛かってやってきている研究が何故遅々として進まないのか、またその研究を繰り返し紹介することで、聴衆である多くの研究者に問題意識と解決策の提案の場を提供することにもなる。研究者本人にとってはライフワーク的な位置づけで有り、それは本人のみならず農業に於ける革新的な変革をもたらす程の価値のある位置づけでもある。あるひとつの技術の進歩が、多くの技術革新をもたらし、一気に飛躍的進歩を遂げる場合も少なくない。時々研究を回顧し解決の糸口を見出すためにも繰り返し、何処までができていて、何処までができていないか、また何が問題かなどの示唆、解説が必要になる。昨年のタイ農業工学会では「超低コスト稲作機械化」と題し、タイでその植え付け方式が平均的に50%に到達した直播栽培について発表した。今回のこの会議では、多分もうこれ以上の稲作機械化システムはないであろうと考えて居る「高水分籾の脱ぷを可能にする至高の稲作機械化システム」と題して発表した。日本の某中小農機メーカーが売り出したインペラ式籾すり機は、その簡易な構造、維持管理が殆ど不要、高水分籾の脱ぷが可能などの観点から、直播と組み合わせれば稲作栽培の大きな革新をもたらすと、筆者は未だその夢を棄てきれないでいる。ここ2、3年の農業機械展示会においても同種の機械が展示されるようになった。ここで再度注意を喚起し、その利点を強調し研究への挑戦者の関心を増やしたいとの思惑でもある。ちなみに AAACU とは Asian Association of Agricultural College and University の略称である。約15年ほど前の退職時に、この組織について知ったが参加した教員の一人が名古屋での会議に出てフィリピンの大学の学長から預かってきた物があるので持参したと言って持ってきて頂いた事を記憶する。その時の学長がかつての博士課程のフィリピンからの留学生が属する大学の学長で有り、面識もある。3大学事業への参加を含めて協定を結び、またその後の3大学事業にも教員1名と学生2名を参加させるために資金的支援をした記憶がある。かつての博士課程留学生が帰国してからのフォローアップでその大学を訪問し10日間ほど滞在し、その期間中連日セミナー講義をしたのも良き思い出である。今回の会議ではマエジョ大学がホストでありアジア諸国の大学からの参加が多くあった。筆者の今回のイベントにおける役割はポスタセッションでの評価委員、さらに農業技術革新のポスタセッションでも同様の任務を頂いた。筆者個人としてはオンラインでの研究論文発表で籾の直播ともみすりコンバインの可能性について15ページのフル・ペーパーを10分で発表するという事で、今回は高水分籾の脱ぷに関する部分のみについて話題とした。最初の講演発表であった事もあってか質問は出ず、とにかく役割を果たしたとの思いである。ピサイヤス大学の前学長、前々学長のあとを受けて。学長の座に座った現学長

夫妻、ならびにかつての博士課程に在籍した留学生のもとで研究活動をしていると云うポスタセッションでの発表者に会い、急激に古い記憶が蘇ってきた思いである。



(Source: 写真は AAACU のホームページからのものである)

長引くコロナ禍で、すべての国際会議の多くがオンラインで開催されてきたが、やっと現地に出向いて直接フェイス・ツー・フェイスで会話ができる初めての集いと言える。しかし気の付いた事をメモとして残しておく。それは従来の同種の集いでは良く準備されたメッセージ・ボードが今回はなかったことである。通信機器の飛躍的發展により、メッセージ・ボードの必要性もなくなったかに見えたが、なかなかそうではない。やはりシムカードの入れ替えなど手間も掛かる。気軽にメッセージを残しておくだけで連絡ができるし、登録受け付けの担当者の手を煩わせる必要も無いからである。

さらに不愉快な事が起きた。研究発表に関わる内容の資料をプリントアウトして配布したいと申し出たが持ち込んだUSBの調子が悪く、さらに大容量のUSBハードディスクを持ち込み、プリントアウトを要請した。対応に出た係員は別のコンピュータでコピーして対応するというので、その必要は無い、ファイルはひとつだけだからそんなことをする程のことではない、と強く言ったがリネームするから問題ないなどと訳の分からぬことを言い続けるのでやむなく、渡したが15分ほど経っても応答がない。受付に出向きその係員に「渡したハードディスクはどうなっているのか」と尋ねると「何のことか」と全く忘れていた始末で不愉快であった。もう頼みたくないから返してくれと言って返却を迫り、取り戻したが、15分間もの間、筆者のハードディスクからコピーしたファイルはいったいどうなったのか。このようなお粗末な対応から貴重な情報が安易に漏れるのだと言う危険性をあらためて認識し、不用意にファイルのコピーや印刷を依頼すると、とんでもない事になると自分を戒めた次第である。